

有形無形の人助け (松井秀喜)

校長 桐野 和之

みなさんには今までに大リーグで活躍した松井秀喜選手についての話を紹介してきました。今日は松井選手の野球以外の話で、他の人との関わり方で彼がいつも大切にしている考え方について二つ紹介したいと思います。

まず、1つ目は、彼のチャリティー活動です。いくつかを紹介します。



○平成一二年一月

新聞で、「心肺同時移植のため渡米する少女のための募金活動」という記事を読み、二百万円を送りました。しかし、少女は残念ながら亡くなりましたが、「がんばったね。ゆっくり休んでください」色紙を書いて送ったそうです。

○平成一七年正月

インドネシアスマトラ沖地震の被災者への義援金として五千万円を寄付しました。これは個人としては、国内最高額と言われています。



○平成一九年

ふるさとである能登半島地震の被災者への義援金として、一千万円を石川県共同募金会へ寄付しました。

ベトナムの、孤児として暮らす十人ほどの子どもたちに対しても、経済的里親として支援金を送っています。ここには、自分の働いた給料の一部を義援金として送付し、地震などで困っている人たちの立ち直りに貢献したり、病床の子どもを励ましたり、優しいメッセージを届けている姿があり、具体的な、外に見える形（有形）で、多くの人たちを勇気づけ、助けるなどの社会的貢献の姿が見受けられます。しかし、私にとってもっとすごいと思ったことは次の二つ目の話で、作家の伊集院静さんがテレビで語っていた松井選手の話です。「松井選手は中学二年生の時から人の悪口を言ったことがない」ということです。私はそのことを「若者、大の大人に限らず、そのような心の持ち主が本当にいるのだろうか」と、一瞬疑ってしまいました。その時、松井選手は三十六歳でしたから、なんと二十年以上もの長い期間悪口を言っていないことになると思いますが、後で、「人の悪口を言わない」ことを自分の信条にしているということを知りました。どうですか、みなさん、「ある一部の人から、嫌なことを言われる」「陰で自分の気になる事を言われた」「無視される」などで、悩んだり、苦しんだりしたことないですか。また、何気なく、つい、友達の悪口を言い、憂さを晴らそうとしたことなどはありませんか。人は、自分が思い通りに行かなかったり、苦しい立場にあると、グチとして外に出したり、そのことを他人のせいにしがちになります。そして、ややもすると、それは他人への悪口として、表れます。でも、悪口を言っても、問題は解決するわけではありません。場合によっては、悪口が、その相手の耳に届き、状況が悪い方向に進むことにもなります。「悪口を言わない」ということで、「他人を傷つけない、他人に嫌な思いをさせない」ことにつながることを考えれば、「人が救われる」ことにもつながるわけです。これは、「悪口を言わない」という、気持ちの持ち方、心構えだけでできる、お金のかからない、無償で、無形の人助けと言えます。ぜひ、他の人との関わり方や生き方の参考にしてほしいと思います。



紙上授業公開③

美術特別授業6／14

美術の授業にゲストティーチャーをお招きして、日本の伝統文化である和菓子づくりについて実演を交えながら学びました。

ゲストティーチャーを務めて頂いたのは富士見台駅近くにある和菓子店、木村家さんのご主人です。子どもたちのことを考えて、和菓子に見立てた粘土を利用し和菓子をつくる過程を見せてくれました。

色合いや模様付け、練り方、その他について熟練された素晴らしい技を生徒達にわかりやすく示してくれました。和菓子づくりの実演を見せていただいた後、生徒達は実物の和菓子を手にして和菓子の鑑賞を始めました。

目で見て、匂いを嗅いで、手で触ってみて、そして実際に味わったり、噛んだりする食感を楽しむことをとおして和菓子の鑑賞をしました。

和菓子を手にした生徒達は興味津々に、じっくりと楽しみながら鑑賞を続け感じ取ったことや気付いたことをワークシートにまとめていました。授業はこれから和菓子をモチーフにした作品作りへと進んでいきます。どのような作品ができあがっていくのか楽しみです。

ただ見ていて楽しかったのは、鑑賞していた生徒達が手にしていた和菓子を、「何だか食べるのがもったいない」と言っていたことが大変印象的だったことでした。



2年生 国語「短歌」6／13

授業では短歌について学んでいました。授業のめあては、①短歌のリズムや表現方法等の特徴を知り、作品を味わおう。②情景を想像し、短歌に込められた作者の思いについて自分の考えをもとう。③伝えたい事実や心情が効果的に伝わる表現で短歌を作ろうです。授業は以下の短歌を参考に短歌の基礎的な知識の学びに入りました。

「観覧車 回れよ回れ 思い出は 君には一日 我には一生」

五七五七七の三十一音で構成されていること。基本となる五音、七音よりも文字数が多いと字余り、五音、七音よりも文字数が少ないと字足らずであること。内容や意味の切れめとなることを句切れということ。短歌は詩の一種であり、定型詩であること。そして数え方は「～首」と数え、江戸時代以前は「和歌」、明治時代以降は「短歌」という事を学習していました。次の時間は俵万智さんの短歌を基にさらに学習を深めていく予定となっていました。



1年生 男子保体「ソフトボール」6／17

最初にアリーナホールに集まり、ソフトボールの講義がありました。

グローブを利用したキャッチボールのボールのキャッチの仕方、注意、配慮について先生から指導がありました。そし



て、安全管理として、もしいきなりボールが飛んできた場合にどうするのか説明がありました。

心配なのは目。どこにボールがあるか分からない場合にはグローブで目を隠し保護すること。頭はソフトボールの場合はボールが柔らかめなので目を一番に防御することが必要と指導がありました。



指導後、さっそく下校庭に出てキャッチボールを始めました。二人一組になって始めました。その際に先生からは、次時のゲームを意識したストライクゾーンについて、概ね膝からみぞ落ちぐらいまでの間が当てはまると指導がありました。生徒は適宜、互いに距離をとってキャッチボールを始めました。また、途中で再度先生からストライクの位置やゾーンについて説明がありました。説明の時にはキャッチボールをしている生徒同士の間立って、バッターボックスに立つ振りをしながらストライクの位置やゾーンを確認していました。

授業の終わりに次時のゲーム形式の内容確認、さらに今日の授業でケガがなかったかどうかの確認をしてから終わりました。

夏休みの思い出

中学生の時、部活動（柔道）の最後の試合が7月の上旬で終わってしまい、全国大会出場という目標を失い、全く生活に力が入らなくなった時期があった。いったいこれから何を目標に生活すれば良いのか。一気に力が抜けた。「もう自分には勉強しかない」。何か自暴自棄に物事を考えていました。

私は北海道で中学校時代を過ごしたので、夏休みは25日間。本州に比べると短い。でも、この日数を勉強だけで過ごす自信はなかった。というよりもそんなことが自分にできるのか疑問だった。それでも最初の10日間程度は何とか勉強した。受験のプレッシャーか。当時の北海道は高校の絶対数が少なく、高校進学といっても当たり前のように中学浪人が出る時代。本当かと思っていると思いますが、事実です。でも勉強から逃げたい、というか何か自由が欲しい。ほんの少し楽しみたい。そんな時は友人との「相談だ」と考えた。



仲の良い友人がたまたま我が家を訪ねてきた。「なんか楽しいことないか」と聞くと、「良い考えがある」と乗ってきた。「俺の親戚の家に一泊で遊びに行くべえ」とアイデアを出した。「電車賃と昼飯代ぐらいあれば後は何とかなる」。その後は一気に行動に出た。

自分達が住んでいたのは釧路市。その隣町だった白糠町を目指す旅を思いついた。隣町と言っても50km以上は離れている。電車代と昼飯代は何とか小遣いで調達。朝9時ぐらいに家を出発し、電車で10時には目的地に到着。あとは友人の姉の家にお世話になる。近くの湖で一日泳ぎ回り、珍しく晴れていたせいか真っ赤に日焼け。友人宅は商店を営んでいたので夕方以降は店の手伝い。夕飯をごちそうになり、夜中まで起きてたわいもない四方山話。そして眠りにつく。ほんのわずかな旅だったけど、お金がない中3生にしては2日間効率よく遊べたし、充実していたと思う。親にはちゃんとことわった正直な自分がいたし、目標が無くなった自分を上手くコントロールしたと思う。勉強もその後は何とかはかどったように思う。少しはやる気になった。自分のやる気を自分で工夫して何とか引き出した。仲の良い友人がいたからこそできたことかもしれない。とにかく楽しかった。中学生の頃の微かな記憶だが、どういう理由か今も鮮明に覚えている。少しの息抜きが大きな力を発揮し、ちょっとしたきっかけで「変われるもんだ」と思った。悩んだら立ち止まる。相談する。必要なことです。仲の良い友人のおかげか。

関心・アリ（読売新聞記事より）

プラスチック製容器のゴミ削減が求められる中、食べられる容器が注目を集めているという。開発の背景や、普及の可能性を探ってみた。

静岡県伊東市で5月下旬に開かれた、海の環境を学ぶイベント「サバーソニック&アジロックフェスティバル」に足を運んだ。会場には出店が並び、地元の水産物を使った料理が提供された。近所の浜野ひな美さん（8）、まな花さん（5）姉妹は「さばタルタルサンド」を食べ終えると、食器にバリバリとかじりついた。母の絵梨さん（34）も「想像以上においしい」と笑顔だ。

会場では、食べられる食器「イートレイ」を1枚100円で販売しており、来場者はそれを購入して出店で料理を盛ってもらう。記者もさばの棒ずしを購入し食べてみた。棒ずしはもちろん、イートレイのおいしさには驚いた。歯ごたえがあり、えびせんの香りが鼻に抜ける。

「イート（食べる）」と「トレイ（容器）」をかけたイートレイを製造するのは、アイスもなかの皮を製造する丸繁製菓（愛知県碧南市）だ。専務の榊原勝彦さんが約10年前、B級グルメのイベントでゴミ箱に使い捨て容器があふれているのを見て思いついた。小麦粉ではなくジャガイモのでんぷんを使うことでおいしさと強度を両立させ、カレーライスを盛りつけても水分が染み込まない耐水性を実現した。環境意識の高まりで、2020年頃から問い合わせが増加。21年度の販売枚数は前年度の4倍になった。プラスチック循環利用協会の調査によると、19年に国内で排出されたプラスチックゴミは850万トン。国連環境計画によると、一人当たりの排出量は米国に次いで2番目に多いという。



食べられる容器を本格的なビジネスにしようと取り組む企業も。アサヒビールは21年3月、丸繁製菓と共同で、飲料用の食べられる容器「もぐカップ」を開発し、発売した。チョコ味などがあり、21年度の販売個数は目標を上回る2万6000個。1月に新会社を設立し、販売と新商品の開発を進める。

新会社の吉原徹さん（37）によると、コロナ禍前のビールのイベントでは3日間で5万杯のビールが売れたという。「もぐカップにすれば5万個分。各地のイベントに広げればビジネスになる」と話す。

課題は価格だ。200ミリリットルサイズの価格は5個で1188円。プラ製や紙製の10倍以上する。吉原さんは「価格を下げる努力をしつつ、ただの容器ではなくお菓子になる点もアピールしたい」と話す。

食の付加価値としても注目される。ホテル日航つくば（茨城県つくば市）は、もぐカップを活用した料理を開発する。5月下旬、タコライスとビーフストロガノフを盛りつけ、それぞれ800円と900円で販売。約100食ずつ売れる好評ぶりだった。東京海洋大学教授の東海正さん（海洋生物資源学）は「おいしく楽しめ、環境問題を考えるきっかけになる。レシピの開発が続けば、新たな容器も出てくるのでは」と話す。